

# 「共生思想」の原型——日本の自然観の探求

The Achetype of the Idea of Symbiosis: A quest for the Japanese View of Nature

陸 薇薇 (基礎教育センター) \* 呉 未未 (東南大学日本語学科) \*  
Riku bibi Go mimi

**ABSTRACT** In recent years, the expression “symbiosis” or “the idea of symbiosis” has been widely used in many countries of the world. Actually, it is Kisho Kurokawa, a Japanese, that invented this expression. What on earth does “symbiosis” mean? And how is it related to the culture of Japan, especially the traditional Japanese view of nature? This paper answers the questions above.

## 1. はじめに

21世紀に入り、世界にはいくつかの変化が見られる。

まず、我々のライフスタイルの見直しが迫られている。19世紀から20世紀にかけては自然科学の万能時代だといわれていた。科学技術の進歩は実にめざましく、大量生産による大量消費の社会が作り上げられてきた。大量生産・大量消費・大量廃棄型の社会経済システムは、我々の生活水準を大幅に向上させたが、環境にも多大な負荷を与えてきた。その結果、負荷は自然のもつ回復能力の許容限度を超え、その影響が地球規模にまで及び、ますます深刻化している。我々は、人類史上はじめて「地球の限界」に直面し、このまま推移すれば将来の世代に重大な制約条件となる負の遺産を残す結果となりかねない。世界中の国々はこの問題の重大さに気づき、環境問題に取り組み始め、持続可能な社会<sup>1)</sup>を目指して努力している。

次に、西洋思想のゆきづまりから、東洋思想が見直されている。『西洋の没落』<sup>2)</sup>を著したドイツの有名な文化

哲学者オスワード・シュペングラーはその代表的な論者の一人である。自然科学にかぎらず、人文社会科学の領域においても西洋諸国がリードしてきた歴史があるが、20世紀後半から東洋があらためて注目されるようになった。かつて、西洋が学問や文化の中心であることを自負していた欧米人は、東洋の思想や宗教に対してあまり関心を示さなかった。21世紀はアジアの世紀といわれ、東洋思想への関心は高まりつつある。特に、環境思想における東洋思想の意義が重要視されている。

その中で、共生の思想は注目を集めている。共生の思想が芸術・文化・政治・経済・科学・技術の各分野にわたっている。「異なる民族間での共生」、「歴史と未来の共生」、「都市と農村の共生」などがあるが、小論で検討したいのは「人間と自然との共生」である。

## 2. 共生とは

近年世界中の国々では「共生」、あるいは「共生の思想」という言葉がよく使われるようになった。「共生」は一体どういう意味だろうか。この言葉を提唱した日本の有名な建築家、黒川紀章氏は次のように述べている。

「共生」という言葉のルーツは仏教思想である「ともいき」思想と生物学の「共棲」の形態を重ねて作られた、いわば現代を反映した造語といえる。<sup>3)</sup>

1987年黒川氏が著した『共生の思想』という本が世に出た。そのうち、英語版も出版され、世界中で波紋が広がった。

械文明というものである」と指摘している。

<sup>3)</sup> 黒川紀章:『新共生の思想』, p.1, 徳間書店, 1996年。

<sup>1)</sup> 日本国土交通省は持続可能な社会を「環境の有限性を認識し、環境のもたらす恵みを将来世代に引き継ぐという視点から、自然との共存が図られ、自然界の物質循環や生態系への負荷が小さい諸活動が展開される、最適生産・最適消費・最少廃棄型の社会経済システムが実現された社会」と定義している。

<sup>2)</sup> オスワード・シュペングラー著、村松正俊訳:『西洋の没落』, 桜井書店, 2001年。この本は第一次世界大戦後に発表され、ベストセラーになった。オスワード・シュペングラーはこの本の中で「文化というもの、発生、成長、没落を経るものである。この立場から、西欧の文化は、いま、没落しようとしている。このときの文化は、ある共通した特徴をもつだろう。それは、外面的な便利さを追う機

黒川氏は自分の考えが椎尾弁匡師に大きく影響されたと言っている。椎尾弁匡は日本を代表する近代仏教推進者であり仏教学者である。彼は1922年に「ともいき会」を結成し「ともいき運動」を発足させた。「ともいき運動」の基調は仏教の基本思想といわれる「縁起」なのである。

仏教は無我の根底に立ち縁起を実相を主張いたします。すべてに個体の孤立を認めませぬ。一切は縁によってできあがってゆくのであります。誰人といえども一個人として独存すべきものではありません。この肉体が衆縁の合成であるように、その存続もまた衆縁の力であります。縁に遠近の差別こそあれ、全法界をあげて、一切が相依相関でないものはありません……<sup>4)</sup>

「縁起」を簡単に説明すると、例えば、私は私一人の力で生きているわけではない。過去を振り返れば、私には両親がいて、両親にはそれぞれ一人ずつ父母(私から見れば祖父母)がいる。その祖父母にはまた一人ずつ父母(私から見れば曾祖父母)がいる。たった3代さかのぼっただけで、私がこの世に生を受けるまでに8人と関係している。10代さかのぼると1024人である。

また、私たちが毎日食べるお米も口に入るまでには、小売店の方、運送の方、農協の方、生産者、お米が実るために必要な養分を作る微生物、そして天候までありとあらゆるものが私たちの命に関係している。

これらのことに思いをめぐらし、ともに支え合いつくしあうことが大切であることを仏教が唱えている。そして、椎尾氏がそのことを「ともいき」と表現したのである。仏教辞典の中には、「共生」の語源は椎尾弁匡師の用語であると主張している。でも、ほかの辞書に調べてみると、次のような結果となった。

(1) 『広辞苑』(岩波書店、1995年刊)

「[共生・共棲] ①ともに所を用じくして生活すること。②異種の生物が行動的・生理的な結びつきをもち、一所に生活している状態。共利共生と片利共生と分けられる。寄生も共生の一形態とすることがある。」

(2) 『日本語辞典』(講談社、1995年刊)

(3) 『国語大辞典』(学習研究社、1978年刊)

(4) 『国語辞典』(集英社、1993年刊)

これら三つの辞典は『広辞苑』とほぼ同じ説明なので省略する。

(5) 『大辞林』(三省堂、1995年刊)

『広辞苑』と同じ説明をしたあとに、「③子と母親の相互依存の状況」と意味づけており、さらに「共生感」という語彙も収録し、「人間が自分以外の事物にも共通の生命

があるとみなす心性。呪術や宗教の発生する基盤にあると考えられる」と説明している。

辞書の中の「共生」に対する定義はほとんど「共棲」の概念、言い換えれば生物学の角度から説明していることがよくわかる。

われわれは「共生」の概念を把握するには、2つの注意点があると考えられる。1つは、「共生」はむしろ生物学でいう共棲と同じではない。それは仏教の思想からヒントを得、幅広い分野で使われている語彙である。

もう1つ、共生思想は発端が「ともいき仏教」との出会いにあるが、仏教の思想の延長と誤解してはいけない。辞書の中の説明はほとんど仏教のことに言及していないのはそのためではないかと筆者は思う。黒川氏はこう言う。「共生の思想は、仏教思想を含みながらも、はるかに広い世界の領域へと拡大された新しい思想と考えている。仏教思想にルーツがあるとしても、仏教は決して排他的な宗教ではなく、あらゆる日本文化の形成の過程で日本的な生活の様式、美意識のなかに同化されてきた。(中略) 共生の思想は日本文化の伝統的発想と深く関連している」。<sup>5)</sup>

これからは共生思想と日本文化の伝統的発想との関連、特に日本の自然原理や神仏習合との関わりについて説明してみたいと思う。

### 3. 日本的自然原理

#### 3. 1 「生む」哲学

田中晃は「いのちの連続性」の哲学の根拠を、西欧的な「造る」とは異なる日本的な「生む」から見出している。すなわち、「『生む』が『造る』と異なるのは、生むものは主体でありながら、生まれるものも単なる客体にとどまらずまた主体であるという一事である」<sup>6)</sup>ということ認識して、さらにその「自然」観への影響を西欧における超越神との比較から次のように述べている。

旧約の超絶神が端的に無より創造するのに対して、古事記の神々の国土生産は修理固成である。創造が「造る」に対して「生む」であることは、「生む」が生み得る能力を予想しての修理固成であることを意味する。……かくて「生むもの」は生む働きの根源を回想するが故に、生むものは造るものの如くに端的に主体的ではない。……造るものは端的に主体であり、造られたものは端的に客体であるが、生むものは生む根源を回想し、生まれるものは根源から生まれるものであるから、生むものと生まれるものとは

<sup>5)</sup> 黒川紀章:『新共生の思想』, p.3, 徳間書店, 1996年.

<sup>6)</sup> 田中晃:「日本の自然観としての連続観」, 『思想』, p.209, 1939年2月号.

<sup>4)</sup> 『椎尾弁匡選集』第9巻, p.7, 山喜房仏書林, 1972年.

相対的二極として俱にこの根源に依存する。造られるものが造るものに内含され尽くすのに対し、生まれるものは生むものを通し、生むものは生まれるものを通して、等しくこの根源に帰向する。この根源が「葦牙の如萌え騰るもの」であって、吾吾はそれを仮りに能産的自然とも称し得るであらう。<sup>7)</sup>

要するに、能産的自然は、超越神によって天地が無から創造されたとき、能産的自然である天地が「単なる客体として放置されるに對して、この客体を主体にまで翻転したことを意味する」<sup>8)</sup>のである。すなわち、根源的生産力として能産的自然へ復帰することによって、「客体」がそれぞれの存在を担う「主体」であるという意味を持つてくることになるのである。

古代中国の哲学と宇宙観の集大成である『易経』に同じような考えが見られる。『易経』は「太極は兩儀を生み、兩儀は四象を生み、四象は八卦を生む」と説く。実際、太極＝兩儀、兩儀＝四象、四象＝八卦である。だから、生むといっても、生む側だけが主体であるわけではなく、生まれる側もまた主体になるわけである。東洋思想の底流にあるこの考えは自然観に影響を与え、西洋と東洋の自然や環境の扱い方が違ってくるのはそこに原因があると考えられる。

### 3. 2 「自然」との融合

日本の「自然」主義の「自然」は、「生命」の絶対性・内在性を前提とした「生命＝本質」へ主体としての「我」と客体としての「世界＝nature」の「対立」的關係認識はあるが、その程度は弱く直ちに自他の「帰一」「融合」が行われる<sup>9)</sup>。典型例として、田山花袋と相馬御風の文があげられる。

自然が外部と内部とにあることはしつてゐることが肝心である。自分の内面も亦一自然である。他の宇宙が自然であると同じやうに、矢張自己も一自然であるといふことである。そして同じ法則が、同じリズムが同じやうに自他をとおして流れているといふことである。であるから、自然なもの、真なもの、法則に近いもの、リズムに近いものは自己であって、そして又他であるのである。従つて自然なものが、一番他と共鳴するのである。そこに芸術の生命

があり、根本がひそんでゐるのである。<sup>10)</sup>

自覚せられたる自然主義の三昧境は、知識と感情とのながい対峙の果ての疲労から偶然にも到り得た主客両体の融合境の自覚に外ならぬ。……写実主義の所期は単に冷静なる知識の眼を以て自然を觀、事を觀るにあれど、自然主義は知情融合せる心眼を以て万象の往来を觀ずるにある。平たく謂へば、写実主義は客觀の事象を客觀の事実そのものとして写し、自然主義は客觀の事象を我と生命を同じうせるものとして、之を觀るにある。<sup>11)</sup>

この田山および相馬にみられる主体と客体が融合しているありさまは、日本人が自然に込める意味合いを「もろもろのものであり、その物を生々する運動であるが」、「かつて天地と捉えられていた無限定な究極性がそこにみとられている」<sup>12)</sup>という指摘に通じるものである。

日本の伝統的な自然観の核をなすのは「自ずから」であるが、それは本質無規定のまま、自発的に生成することを意味するものであるといわれる。デカルトに始まる近代哲学と自然科学が、明らかに人間による自然の操作を打ち出して、西洋的な主観－客觀の対立を明らかにしてきたが、日本では、こうした客体的存在としての自然ではなく、「生ける自然」「大いなる自然」というものであった。丸山真男が『歴史意識の「古層」』の中で、日本人の発想を「なる」型であると指摘して、キリスト教に代表される人格的超越者をふまえた「つくる」論理に対比させ、『古事記』の冒頭の一文を引きながら、日本人の神は天地のエネルギーの噴射によって次々に「成りませる」神であって、神の背後に生成の働きそのものを見ていることを明らかにしているように、日本人にとって自然はもっと自発的で、神聖なものであったのである。<sup>13)</sup>このような自然だからこそ、人は自然と対立するのではなく、融合することができる。そして、こういう自然に対する認識は今日の「人間と自然との共生思想」に通じるものがあると言える。

## 4. 神仏習合

### 4. 1 アニミズムの原始信仰

日本列島は豊かな自然に恵まれ、四季の変化は明らかで

<sup>7)</sup> 前掲書 p.209

<sup>8)</sup> 前掲書 p.209

<sup>9)</sup> 稲田敦子：『共生思想の先駆的系譜』, p.30, 木魂社, 2000年.

<sup>10)</sup> 柳父章：『翻訳の思想—「自然」と nature—』, p.113, 平凡社, 1977年.

<sup>11)</sup> 前掲書 p.124-125

<sup>12)</sup> 相良亨：『講座日本思想1 自然』, p.127, 東京大学出版会, 1983年.

<sup>13)</sup> 『歴史意識の「古層」』, 『丸山真男集』第10巻, 岩波文庫, 1997年.

ある。こういう自然環境は日本人の特有の感情と生活様式を生み出した。人々は自然の恵みをありがたく思い、森羅万象に大きな力の働きを感じてきた。だから、自然そのものを神様として崇めてきた。一木一草まで神様とし、太陽には太陽の神様、水には水の神様、木には木の神様、川には……、いわゆる八百万の神々の信仰である。

日本の神とゴッドとは違う。ゴッドは一神のことであるが、日本ではありとあらゆるものが神様だ。一番特別な力を持っている神様、あらゆる能力を備えた神様は存在していない。

一神教を信ずる地域では、夏でも光が弱いなど、自然環境が厳しい。自然はありがたい存在ではない。うっかりすると、自然に殺されてしまう。自然にいかにか打ち勝っていくかということは人間が生きていくための条件なのである。だから、一神教の世界には唯一の神様、全知全能の神様がいる。自然を作って、最後に自分の姿を見せて、人間を作ったという。キリスト教の「創世記」には自然に勝つことが大事だと記されている。つまり、人間は自然を征服するという事は神様から与えられた特権なのだ。征服するためにいろんな方法を考え、科学技術の進展がそこから生まれた。

日本は明治維新以降は科学技術、自然観まで取り入れたけれど、古くから神道が人々に信じられてきた。神道の自然観と一神教の自然観とは大きく違う。

例えば、山登りをする時、西洋の人はより高い山、より険しい山に登りたい、征服したい。日本では、山登りは信仰から生まれた。神様は山にいて、山に登れば、神様に近づくことができると信じている。より高い山、険しい山に登れば、ありがたい神様の力をもっといただけたと思われている。だから、西洋の人が登ったら、名前を書いたりし、征服の印をつける。それに対し、日本人はお金、お米やお酒などのお供え物を置き、神様に感謝の意を表す。

日本の原始信仰は、自然物への崇拜、精霊への崇拜という、いわゆるアニミズムの形態であった神道だが、それは縄文時代の遺跡から確認されている。「八百万の神様」といわれるように、山、河、日、月、雷、風、自然のありとあらゆるものが日本人にとって神である。ここから、日本人は自然の至る所に神を見るほど、自然を愛したのだといわれる。もちろんそういう面はあるが、必ずしもそうとは限らない。

歴史学者、自然人類学者梅原猛は「古代人にとって、自然は、人間の力を越えて、人間に、災害と共に、恩恵をも与える魔的なものであった。この魔的な自然を祭って、怒りを鎮め、自然から恩恵のみを引き出す、それが古代人

の自然崇拜の意味であった」<sup>14)</sup>と述べている。つまり、古代の日本人は自然を愛するより、むしろ恐れていた。自然への恐れは、日本人が自然を神として祭るゆえんである。

#### 4. 2 仏教との習合

日本的自然観はアニミズムの原始信仰だけから影響を受けたのではない。外来の宗教としての仏教も日本人に深い影響を与えたと考えられる。

仏教の生命観では、生き物の殺生を必要最小限にとどめるべきことが提唱される。人間の命だけではなく、動物、植物の命も大切にすべきだという考え方が一般的である。もっと広げて、「草木国土悉皆成仏」というように、山川草木すべて命を持っているという教えがある。それは神道と共通しているところは多いと言えよう。

仏教が伝来したころ、日本ではそれを採用するかどうかにして論争があった。『日本書紀』によると、当時欽明天皇が、仏教を信仰の可否について群臣に問った時、物部尾輿をはじめとする神道勢力は仏教に反対した。一方、蘇我稲目は、西の国々は仏教を信じているから、日本も信じたらどうかと提案した。両派の争いは物部尾輿・蘇我稲目の子供達（物部守屋と蘇我馬子）の代にまで持ち越され、結局、物部守屋が滅亡され、仏教は国家鎮護の道具となり、天皇家自ら寺を建てるようになった。人々も仏教を受け入れ、現世祈願的なものとして信仰し、あたかも固有の神を祀るのと同じ形態で仏に対したのである。

神と仏が接近し、習合していく。さらに、仏教經典にいう鎮護国家の思想はしだいに朝廷の帰依を強く得て、仏教に対する国家的保護は日増しに強まっていく。このような状況の下で、本地垂迹説が出てきた。

本地とは、物の本源、本来の姿をいい、ここでは仏や菩薩の本来の姿のことをいう。垂迹とは、仏や菩薩が衆生を救うために、仮に日本の神々になって現れるという意である。したがって、本地垂迹説とは、本源としての仏や菩薩が、人間を利益し、衆生を救うために、迹を諸方に垂れ、神となって形を現わすという説のことである。<sup>15)</sup>

本地垂迹説の発展は、神仏習合を急速に普及させ、習合現象は各面におよぶようになり、人々の暮らしに根を下ろした。たとえば、日本人の家に神棚と仏壇がともにあることが普通である。また、日本人にとって大切な祝日であるお正月とお盆はそれぞれ神道と仏教に管理されている。しかも、両者は多くの点で相似形をとっている。迎えられるものとして、正月では、「年神さん」、「歳徳さん」、「正月

<sup>14)</sup> 梅原猛：「日本の自然観」, 毎日新聞社。

<sup>15)</sup> 遠日出典：『神仏習合』, p.97-98, 六興出版, 1988年。

さん」など、盆では、「御精霊さん」、「先祖さん」などがある。また、それらを迎える準備としては、暮れの松迎えに対して盆の盆花迎えがある。門松も盆花も迎えられる祖霊の依代だという。このように、生活の中にみる神仏の関係は、自然な形で、溶け合っている。

鶴見和子氏は、「人間と自然との共生の思想はアニミズムの名で呼ばれる原始信仰に根ざすものである」<sup>16)</sup>と述べている。黒川紀章氏は『「共生」という言葉のルーツは仏教思想である『ともいき』思想にある』と主張する。神道は多神教であるので、仏教を受け入れる土壌がある。そして、黒川氏が言ったように、仏教は決して排他的な宗教ではなく、あらゆる日本文化の形成の過程で日本的な生活の様式、美意識のなかに同化されてきた。日本では神道と仏教は「共生」の形を取っているとさえ言う。

## 5. おわりに

日本は明治維新以降、西洋の先進技術をどんどん取り入れ、脱亜入欧の道を歩んできた。特に、第2次世界大戦後、アメリカナイズが一段と進み、日本固有のもの、伝統思想を軽視する傾向がさらに強まっていた。しかし、ここ数十年、日本では伝統思想を見つめ直す呼びかけが行われてきた。

2004年7月に「紀伊山地の霊場と参詣道」も世界文化遺産に登録された。「紀伊山地の霊場と参詣道」は、自然と人間の信仰心が一体となって織りなした「文化的景観」である。そこは日本の伝統的自然観をよく表しているからこそ、世界文化遺産に登録されたのだろう。

前に述べたように、日本の自然原理は人間が自然に対する見方に大きな影響を及ぼした。そこには東洋と西洋の自然観の根本的な違いが見られる。そして、日本の伝統的自然観が形成される過程で神道からも仏教からも影響を受けたと考えられる。したがって、日本における神道と仏教の自然観は現代の共生思想の原型ともなったのだと筆者は考える。また、神仏習合そのものは「共生」を表しているのではないかとも思う。だから、われわれは「共生思想」を研究する際、そのもとにある日本の伝統的自然観に目を向けるべきである。

「共生」という言葉を作ったのは黒川紀章という日本人である。が、小論にも触れたように、中国などほかのアジアの国にも似たような伝統的な考え方がある。小論は日本の伝統的自然観にしぼって論じたが、中国の儒教や道教

における「共生思想」などを今後の課題にしたいと思う。

参考文献：

1. 黒川紀章著『新共生の思想』徳間書店、1996年
2. 稲田敦子著『共生思想の先駆的系譜』木魂社、2000年
3. 田中晃著「日本の自然観としての連続観」『思想』、1939年2月号
4. 梅原猛著「日本の自然観」毎日新聞社
5. 達日出典著『神仏習合』六興出版、1988年
6. 鶴見和子著『内発的発展論の展開』筑摩書房、1996年
7. 吉田傑俊・卞崇道・尾関周二編『共生思想の探求』青木書店、2002年
8. 水谷幸正著『仏教・共生・福祉』思文閣出版社、1999年
9. 井上聡著「日本文化にみる外来文化の摂取と言語文化の共生」南京大学外国語学院中日文化合作研究中心、2003年
10. 沼田真著『自然保護という思想』岩波書店、1994年
11. 椎尾弁匡著『椎尾弁匡選集』第9巻 山喜房仏書林、1972年
12. 柳父章著『翻訳の思想—「自然」とnature—』平凡社、1977年
13. 丸山真男著『丸山真男集』第10巻 岩波文庫、1997年
14. 相良亨著『講座日本思想1 自然』東京大学出版会、1983年
15. 義江彰夫著『神仏習合』岩波書店、1999年

(受理 平成23年3月19日)

<sup>16)</sup> 鶴見和子：『内発的発展論の展開』、p.188、筑摩書房、1996年。